

創立20周年記念史「先端無窮」の発刊にあたって



奈良先端科学技術大学院大学長
磯 貝 彰

本学は平成23年10月1日に創立20周年を迎えた。そこで平成23年は本学20周年の年ということで色々な記念事業を行ったが、本記念史もその活動の一環であり、20周年を機にこれまでの本学の歩みをまとめることにした。

本学では、創立10周年に際しては記念史「温故創新」をまた、創立15周年に際しては「創立15周年記念誌」を作成し、本学の歴史をまとめると共に、それぞれの時代で本学が期待されることについて、色々な方々の期待の言葉を記録してきた。

今回、人間でいえば成人式を迎えるこの20周年に際しては、これまで20年間の大学全体および各研究科、各研究室の記録や資料を整理し、本記念史が「温故創新」の資料と合わせて、成人前の20年の歴史のまとめとなるように編集した。さらに本記念史では、本学を育ててこられた方々および、本学を支えてくださってきた方々から20周年に寄せる言葉をいただき、記念史に花を添えることが出来た。改めて、玉稿をお寄せいただいた方々、また、本記念史の作成に関わった教員、職員の方々にお礼を申し上げたい。

本記念史の中にもその経過が書かれているように、本学は国立大学の大学院重点化に先だって、先端科学技術分野における教育と研究に特化した大学院大学として構想された。そして、先端科学技術分野に対応するために、既存大学の関連学部を横断・総合化したような、学部を持たない新しい教育研究組織が編成された。そしてそれによって、自らの発想を基盤とした研究テーマや社会の要請する諸課題について優れた研究を遂行すると共に、こうした高い研究力を背景として、それまでの大学院教育に欠落していた、研究科あるいは専攻という組織が責任を持つ「課程としての新しい大学院教育体系」を作り上げることが期待された。

この20年は、こうした本学に対する社会の期待に十分応えてきた20年であったと考えている。それは本記念史をみればわかっていただけることであろう。私は学長就任以来、本学が「先端であり続ける」こと、「小さいながら光り輝く大学であり続ける」ことが本学の目標であると言いつけてきた。本学が「先端」という文字を背負っている意味は重い。「先端」は常に研ぎすまされていなければならない。また、「先端」は時代の中で常に変わり続けていくものでもある。こうしたことから、私達は本学が教育研究の場としている「先端科学技術分野」とは何かを、いつも自問自答しなければならないと考えている。その意味で私は、本学が社会的に存在意義のある大学であり続けるために、これからも窮まりの無い先端を目指していくという決意を込めて、本記念史に「先端無窮」というタイトルをつけることにした。

本記念史が本学のこれからの20年の礎になれば幸いである。